2026年度　ＫＣＮ京都　放送番組審議会 議事録

１．開催日時

2026年10月19日（月）10:00～12:10

２．開催場所

京都府相楽郡精華町光台1－7 けいはんなプラザ交流棟5F　中会議室『ボルガA』

３．委員の出席：委員総数　7名　／　出席委員数　5名

＜出席者名（敬称略）＞

会　長　：　渡辺好章

副会長　：　大崎康弘

委　員　：　渡辺紀子、中川憲一、森本健次（順不同）

ＫＣＮ京都：山﨑理（代表取締役社長）、中島修（経営企画部長）、
加瀬由香利（経営企画部次長）、村上彩寿沙（経営企画部）

４．報告

■ 協議事項

自主放送番組について

ＫＣＮ京都自主制作番組である下記の作品についてご意見を伺った。

作品（1）「お見事！やましろ　＃37 鵜舟船頭/市松人形師」（2026年9月放送）

作品（2）「Step　＃46　硬式野球」（2026年6月放送）

【番組概要】

「お見事！やましろ」

地域住民にもあまり知られていない地元の技術力、産業、技を、[人・まち・技]として、産地発のより深い情報発信をする番組。

[＃37　9月放送内容]

平安時代から続く宇治川の鵜飼を支える鵜舟の船頭と、日本でも数少ない市松人形の職人を取材。異なる分野で伝統を受け継ぐ二人の職人に密着。

進行：笑福亭銀瓶

「Step」

トップアスリートを目指し、自らの夢や目標に向かって練習やトレーニングに取り組む姿を紹介し、「地域で活躍するアスリート」を応援する番組。

［＃46　6月放送内容］

硬式野球の強豪チームでプレーをしている精華町在住の中学一年生、藤本理暉（ふじもと りき）さん。小学６年生の時には全国大会優勝や阪神タイガースジュニアへ選抜されるなど輝かしい実績の持ち主。中学生になって硬式野球に挑戦し、プロを目指し練習に励む姿に密着。

委員からのご意見

〈内容について〉

作品（1）「お見事！やましろ　＃37 鵜舟船頭/市松人形師」

・鵜匠にスポットが当たりがちだが、鵜舟の船頭を取り上げているところに驚いた。興味深く視聴した。
・２つの異なるテーマに共通する軸を見出して制作する番組のため、ネタ探しには苦労しているだろうが、良いネタを探しているなと感じる。地域密着の強みが活きている番組だと思う。
・船頭や市松人形の職人など、将来的に失われる可能性がある技術や文化を映像として記録することには大きな意義がある。
・地域の伝統や文化を紹介するだけでなく、その活動が地域の中でどのように受け継がれているのか、また次の世代にどうつながっていくのかまで掘り下げてほしい。
・伝統を守るためには、昔の形をそのまま維持するだけでなく、時代に合わせて進化させることも必要である。伝統文化について、「何を変えてはいけないのか」「何を変えていくべきなのか」を番組の中で示すと、より深い内容になるのではないか。
・取り上げた人物や題材は魅力的である一方、番組を通じて何を伝えたいのかが、視聴者に十分伝わりにくい部分があった。「人物を紹介したいのか」「技術や文化を紹介したいのか」「後継者問題を伝えたいのか」など、番組の中心となるテーマを明確にすると、より印象に残る内容になる。
・取材前に、番組で何を伝えるのか、どのような視点で話を聞くのかを制作担当者間で共有しておくと、より効果的な取材・編集につながると思うので、担当者同士がテーマや構成について議論する機会を増やすことが望ましい。
・鵜舟の船頭はその技の裏にある訓練、師匠との関係などが描かれていたのに対し市松人形は制作の様子のみが淡々と描かれている印象を受けた。撮影・編集の過程で取材対象者の魅力や苦労がカットされ、伝わっていない可能性があるのではないか。

作品（2）「Step　＃46　硬式野球」

・プレー外の様子にはあどけなさがあるが、試合中の様子や試合後のインタビューでは自信に満ちた表情で印象的だった。映像でしか伝えられない細やかな表情の変化があって良い。
・若い世代が地域で成長している姿を紹介することは、地域の視聴者にとって励みになる。

・野球の技術だけでなく、体幹トレーニングや他競技への取り組みなど、現在の育成方法にも関心を持った。
・選手本人だけでなく、子どもを支える家族の考え方や取り組みも紹介すると、より深みのある番組になる。
・昔のスポーツ指導との違いや、現在の子どもたちがどのような環境で成長しているかを示すと、時代の変化も伝わりやすい。
・インタビューの中で「ら抜き言葉」があったが、そのままテロップに起こされていた。番組内の言葉遣いについて、細かな表現にも放送局としての姿勢が表れるので、意識してほしい。

＜番組制作全体について＞
◇制作番組での AI 活用について
・AI を活用することで、編集作業の効率化や労働時間の削減が期待できる。一方で、AI に頼りすぎると、似たような番組が増えたり、感動を一方的に押し付けるような内容になったりする懸念がある。
・実在する人物を人間が取材し、本人の喜びや悔しさ、葛藤などを伝えることは、番組制作における重要な役割である。人の声や生身のナレーションには、AI 音声とは異なる親しみや温かさがある。AI 音声を導入する場合も、番組の内容や目的に応じて使い分けてほしい。
・AI をどのように活用し、どの部分を人間が担うのかについて、会社として基本的な考え方を持つことが重要である。

◇デジタルアーカイブについて
・TV 離れが懸念されているが、せっかく制作した良い番組が広く視聴されるよう、様々なところで公開し、アーカイブとして残していくことを検討してほしい。
・番組として完成した映像だけでなく、取材時の未編集映像や地域の風景なども、将来の貴重な記録となる可能性がある。現在の街並み、車両、交通機関、人々の暮らしなどは、将来振り返ったときに価値のある映像資料になる。

■　報告事項
・2026 年度自主制作番組内容について
・１分ニュースの実施について
・生活情報発信の強化について
・防災講座の実施について
・インスタグラムの運営開始について
・第 52 回日本ケーブルテレビアワード大賞番組アワードの受賞について
・社員の防災士資格の取得について

以上